

「律法が目指すものはキリスト」

ローマ9：25－10：4

堀田修一 24・2・11

I 異邦人（イスラエル人だけではない世界の全ての人々）の救い

1. 「それは、ホセアの書でも神が言っておられるとおりです。『わたしは、わたしの民でない者をわたしの民と呼び、愛されない者を愛される者と呼ぶ。あなたがたはわたしの民ではない、と言われる場所で、彼らは生ける神の子らと呼ばれる』：25，26。この箇所は、ホセア2：23，1：10のパウロの引用。ホセアが不信のイスラエルについて述べているのに対し、パウロは異邦人（イスラエル人だけではないすべての国の人々）について語っています。ホセア書の一貫したテーマは、背信のイスラエル民族に対する神の絶対的な愛です。「わたしの民でない者」をホセアは、神に背き神に見捨てられたイスラエル民族に対して使っている。神に愛されなくなったイスラエル民族を神はなおも愛して、神の民とされた。この同じ愛をもって、神はご自分とは縁のなかった異邦人（世界の全ての人々、私たちも）を神の民とし、人々を限りなく愛される。このみことばは、神の絶対的な愛の本質と精神を最も適切に表しています。

2. 「イザヤはイスラエルについてこう叫んでいます。「たとえ、イスラエルの子らの数が海の砂のようであっても、残りの者だけが救われる。主が、語られたことを完全に、かつ速やかに、地の上で行おうとしておられる」：27，28。この箇所は、イザヤ10：22，23の引用です。「残された者」とは、「最後まで主（ヤハウェ）に信頼して救われる者たち」のことです。イザヤもパウロも同じ意味で使っています。真に救われるのは、わずかな残された者（主を信じて救われる者）だけであって、イスラエル民族全体が自動的に救われるのではありません。「また、イザヤがあらかじめ告げたとおりです。『もしも、万軍の主が、私たちに子孫（主、ヤハウェを信じる人々）を残されなかったら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになっていたであろう』：29。たとい、わずかであっても、「残された者（最後まで主を信頼する人）」がいることは、イスラエル全体にとっても大きな救いでした。神のあわれみと神が与えられた「残りの者（主を信頼する人）」の存在がなかったら、神の民であっても神に背くソドムとゴモラの人々のように滅ぼされていたでしょう。イスラエル民族も背信と墮落の民であり、決して神の前に自らを选民と誇ることが出来るような存在ではなかったのです。ただ神のあわれみで、神が「残された者（最後まで主に信頼する者）を残しておられるので、今も救いの民が続いているのです。感謝します！

II 異邦人とイスラエルの義（救い）の追い求め方の違い

1. 「それでは、どのように言うべきでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、信仰による義を得ました」：30。この節は、これまで述べてきたことの結論。「異邦人」とは、神とは縁がなく神の義を知らなかった者という意味。異邦人が神の義（主を信じる信仰による義）を得た。それは、宗教的常識ではとうてい理解できないことだが、福音的眞実です。すなわち、異邦人（私たち）は民族的・宗教的特権ではなく、主を信じる信仰による義（神の前に正しいと認められる神の救い）を得たのです。

2. 「しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした」：31。イスラエルは、義の律法を守る行いによる救いを追い求めました。しかし、心に罪があるために、神の律法、義の律法を完全に行うことはできず、その律法の行いによる義、救いに到達できませんでした。イスラエルは律法の文字の上辺を守っていると誇ったが、律法が求める心の聖さや真実な愛に欠けていた。私たちすべての人間は、神の律法を自分の力で完全に守る（心の聖さと愛の完全性）事はできません。
3. 「なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです」：32。イスラエルは、キリストを信じる信仰による救いではなく、自分たちの行いで救われるという誤った考えで、救いを追い求めたのです。「彼らは、つまずきの石につまずいた」＝「つまずきの石」とは、人々をつまずかせる原因となることであり、イザヤはこのことばを象徴的に使っている（イザヤ8：14，28：16）。パウロは、この「つまずきの石」を、キリストとその御業に関して使っています。神の民イスラエルは、神のみこころの啓示である律法に、自己流のやり方で熱心になることにより、その啓示の本質であるキリストに対してはかえって盲目になり、ついに真の救い主であるキリストをねたみや霊的な盲目さで十字架に付けてしまったのです（Iコリント2：8）。
4. 『見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることがない』と書いてあるとおりです」：33。このみことばは、イザヤ28：16と8：14の引用です。「つまずきの石」と「妨げの岩」は、ともにヤハウエである神を象徴し、次第にメシヤ的意味を持って使われるようになった。詩篇118：22以下。初代教会はキリストを表す言葉と理解し、パウロもそのように用いている。神ご自身が、人間の知恵と力に頼る者には、つまずきとなるような方法で、救い主をこの地上に送られた（宮殿ではなく、家畜小屋での誕生も人間の常識では考えられない）。そして、イスラエル民族の多くの者が、この救い主につまずいた（救い主と信じなかった）のです。しかし、この救い主に信頼する者は、昔も今も、決して「失望させられることがない（確実な救いをいただける）」のです。繰り返し言われています→10：11，Iペテロ2：6。

Ⅲ 律法が目指すものはキリスト

1. 「兄弟たちよ。私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです」：1。パウロは、同胞のイスラエル人から、絶えず誤解され、しばしば迫害された。それでも愛、善意を失うことなく、同胞の救いを切望し、祈り続ける。※私たちも、神の怒り、滅ぼされる器であったのに、神のあわれみを受け救われた恵み、愛をいつも驚き感謝し、同胞のため、家族知人友人、能登半島の方々、すべての国々の方々の救いのために祈りたい。震災に会った人々に支援をし、その方々の魂の救いのために祈りましょう。
2. 「私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません」：2。パウロは、同胞イスラエルが神に対して熱心であることは否定しない。実際、ユダヤ人ほど神に対して熱心な心を保ち続けて来た民族はいない。※証し：旧約聖書が子どもたちに教えられている。問題は、その熱心が正しい知識に基づいたものではないということです。「知識」は、神のみこころを深くとらえる知識のことです。ここでは、特に、信仰による義という神の救いの御計画への知識のことです。

3. 「彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです」：3。
「神の義」とは、神の義なる本質、救い主キリストを信じる信仰による神の義。イスラエル人は、その神の義を知ろうとせず、自らの義に頼ろうとした。「自らの義」とは、行いによる自己義認と自己主張のこと。神の民イスラエルの致命的な誤りは、神の義とみこころを認めようとしないで、自己主張に固執していたこと。「神の義に従わなかった」とは、イスラエル民族の誇りと正しい知識に基づかない宗教的熱心のゆえに、神に降伏し、自分たちの行いでは、神の義を全うできないと認めず、へりくだらず、神が与えられた福音＝「行いによらずキリストを信じる信仰による義（救い）」を得ようとしなかったのです。

4. 「律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じるすべての人に与えられるのです」：4。
「目指すもの」の原語は、「終わり、終了、終結、目標」の意→①「旧約の律法が目指すもの、指し示していたのはキリスト」。②「律法の終わり、成就」はキリスト。主は言われた。わたしは律法や預言者（旧約聖書）を「廃棄するためではなく成就するために来たのです」マタイ5：17。キリストは、罪のない生涯と人々の罪の贖い、償いを成就されたので、義（神が罪を赦し神の前に正しいと認められる神の救い）はキリストを信じるすべての人に与えられるのです！神の愛、あわれみ、恵みを感謝！ 応答賛美355。